

## 東京八王子西ロータリークラブ会長賞

秋山 柚衣 (あきやま ゆい) 檜原中 2年生

作品名:「世界から猫が消えたなら」を読んで

図 書:世界から猫が消えたなら

「何かを得るためには、何かを失わなくてはならない。」これがこの本のテーマです。

“僕”は、ある日脳腫瘍という診断を受け、余命が長くて半年ということを知ります。そんなとき、自称アクマがやって来て

「あなたは明日死ぬんです。でももしまだ生きていたいのなら、この世界からひとつだけ何かを消すのです。」

と伝えられます。もしもあなたがこんなことを言われたらどうしたでしょうか。私なら喜んで消したいと思います。そして“僕”も、やはり取引をし、電話、映画、時計という順にものを消していきます。そしてその度に、

「何を得て、何を失ったのか」

を考えます。私が電話を消したら……。世界から電話が消えたなら。朝から晩まで携帯をいじるような文化はなくなり、コミュニケーションの輪が広がる。反対に、遠く離れた人の声は聞けなくなり、連絡手段がなくなる。」といった具合でしょう。当たり前が当たり前ではなくなるということは、正直怖いものなのかもしれないと思いました。それは「死」も同じで、当たり前のように来た明日が突然なくなる。そう考えるとやっぱり生きることは全てだと思います。だから私は、「今」を大切にしようこの本から学びました。趣味を楽しむのも、何かに夢中になるのも、失敗することも、けんかをするのも、仲直りすることも、感動するのも、泣き、笑い、悲しみ、喜ぶのも……。全部「今」なんだと思いました。今日が昨日になり、明日が今日になる。その1日1日が奇跡なんだと私は思います。その1日をどう使うかは自分次第ですが、使い方によって、“僕”のように急に死と向かい合ったときの重さが違うとを感じるからです。

私がこんなに死と向き合おうと思ったのは、最近祖父が亡くなった経験があるからです。

病気になっても必死に治して、必ず「ただいま」と元気に帰って来てくれた祖父。色々なことを知っていて、私たち孫によく豆知識を話してくれました。何より、私が部活から帰ってくると、何をしても、「おかえり。」と出迎えてハイタッチをしてくれるという、とても優しく、愛がある人でした。でも急に体調が悪くなり、寝込むようになりました。1日だっただけかかきなかつたハイタッチもできなくなって、話すこともあまりしなくなりました。そして遂に入院することになってしまいましたが、心の中では「きっとまた元気になって帰って来てくれる。」と考えていたのです。時間を見つけてお見舞いに行っても、だんだん声が出なくなって、話すことも難しくなっていました。そして祖父は静かに目を閉じたまま帰ってきました。その目は私がどれだけ話かけても、生前のように手を取っても開くことはありませんでした。その時私は、なぜもっと話しておかなかつたんだろう、ととても後悔しました。最後のお別れの手紙にいいかつたことを思い出せるだけ書きましたが全然足りませんでした。

“僕”も「死にたくないよ。死ぬのはこわいよ。でも、何かを奪って生きていくのはもっと辛いよ。」と、ずっと一緒に人生を共にしてきた猫を消すことができず、自らの死を受け取めるのです。そして私の心にひびいた言葉、  
—たかさんの後悔、叶えられなかつた夢。それこそが美しいと今の僕は思える。それこそが僕が生きてきた証だからだ。自分らしく生きるはずが生きられなかつた人生。自分らしさすら、見つけることができなかつた人生。でも、ここではないどこかではなく、ここにいてよかつたと思える。—  
この言葉を私はきっと忘れない。とにかく今は必死に今を生きるのが模範解答なんだと思う。